ふれあい福寿会館
サラマンカホール
ふれあいだより 特別号

ESSAY エッセイ

クラシックは面白い ――その 5

肩の凝らないベートホーフェンをどうぞ

ベートホーフェンのピアノと弦楽のための三重奏曲！すごい言葉ですね。何様のおでましかと思います。こういう難しい言葉で 100 年この方日本のクラシックの音楽は語られてきました。それらは皆明治の日本人たちの作った新語なんです。交響曲、協奏曲、奏鳴曲…明治の人たちは聞いたこともない音楽の名前を一生懸命日本語に直しました。よくやったと思いますが、その反面、言葉が独走して、何でもない音楽を難しそうにしてしまったという弊害もあります。三重奏とか四重奏というといかめしいのですが、三人用の音楽とか四人用といえば恐ろしくありません。でも明治の人たちにとっては新しく輸入された“西洋音楽”はとんでもない世界の事件でしたから、こういう神々しい言葉で呼んでしまったのですね。そこには西洋文明に対する恐怖感や劣等感やさらには過度の尊敬が感じられます。

ベートホーフェンの三人用の音楽(三重奏)でピアノと弦楽(明治には絃楽といいました。絃つまり糸が弦つまり弓に変ったのは 1950 年頃です。これは改悪でした。）のために書かれた曲は 9 曲ほどあるのですが、ベートホーフェンが書いたのはご大層な芸術音楽ではなくてパーティ用の肩の凝らない音楽のはずでした。ここではピアノが主体で、弦の二人は刺身のつまです。（モーツァルトのヴァイオリン・ソナタというのも、実はピアノ・ソナタでヴァイオリンは伴奏なんです。ですからモーツァルトは“ヴァイオリン伴奏つきのピアノ・ソナタ”とはっきり書いています。あれをヴァイオリンのソナタにしてしまったのは 19 世紀の後半なんですが、そんなことを知らない 20 世紀の人は、みなヴァイオリンのソナタだと思っています)。ベートホーフェンも Op.70 の 2 曲の三重奏曲の出版交渉をするとき、手紙の中で“2 曲のピアノ・ソナタ”と呼んでいます。(ピアノ以外の２人のことは眼中にない？　つまり伴奏で端役というわけです。お気の毒ですが)。

そして同じく“ピアノと弦楽のための三重奏曲第 8 番”とされている曲はベートホーフェン自身の楽譜への書き込みは「ヴァイオリンとチェロの伴奏つきのピアノ・ソナタ」となっています。この曲は当時 10 歳(1812 年)のマクシミーリアーナ・ブレンターノというお嬢さんのピアノの練習用に書かれたものでした。

ところで、このお嬢さんは何者なのでしょうか――大ベートホーフェン先生から曲を書いてもらうなんて。

種明かし。ベートホーフェンは一生に一度だけ結婚を考えるような女性とのアドヴェンチュアがありました。その女性には夫も子供もありました。というわけで彼は一生独身に終るのですが、その女性の名はアントーニエ・ブレンターノ、その娘がマクシミーリアーナちゃんなんです。

（陰の声。もっと詳しくそのことを知りたい方は石井宏著「ベートーヴェンとベートホーフェン」七つ森書館の第５章「不滅の恋人」をご覧ください。）

執筆／石井 宏（音楽評論家）
1930 年、東京生まれ。音楽評論家・作家・翻訳家。モーツァルト評論の第一人者と目され、評論活動のほか、ラジオやテレビの番組でも評判となる。2004 年、『反音楽史　さらば、ベートーヴェン』（新潮社）で山本七平賞を受賞。

樫本大進＆小菅優＆クラウディオ・ボルケス トリオ

2016 5/22(日) 開場14:30 開演15:00 サラマンカホール

©Daisuke Akita

©Marco Borggreve

©Neda Navaee

《 オール・ベートーヴェン・プログラム 》
ピアノ三重奏曲 第３番 ハ短調 Op.1-3
第６番 変ホ長調 Op.70-2
第５番 ニ長調「幽霊」Op.70-1

チケット料金
S席 5,000円（サラマンカメイト4,500円）
A席 4,000円（サラマンカメイト3,600円）
全席指定・学生半額（30歳まで）　※未就学児の入場はご遠慮ください。

音楽講座 ベートーヴェンのひみつ
2016.5/15(日) サラマンカホール リハーサル室 17:30 開講（90 分）
料金／500円　先着 40 名（事前申込制）※開場 17:15（ホール入口より入場）※定員になり次第締め切らせていただきます。
お申し込み先／サラマンカホール事務室　✆058-277-1113

ふれあい福寿会館　サービスセンター　✆058-277-1110　ほか プレイガイドにて　主催：サラマンカホール　サラマンカホール 検索　Facebookでチェックしてね　芸術文化振興基金助成事業